

# 歴史に学ぶ 「白村江の戦い」

兼田 吉治 (26期)

日本は歴史上、海外勢力の占領下に入る危険性が非常に高まった時期が3度ある。1つは第二次世界大戦での敗戦、2つ目は蒙古襲来と言われる元寇、そして3つ目が「白村江の戦い」での敗北である。いずれの戦いも日本の外交、国防、内政、文化に大きな影響を与えた。

白村江の戦いとは、天智2年8月(663年10月)に朝鮮半島の白村江(現在の錦江河口付近)で行われた、倭国(日本)・百済連合軍と唐・新羅連合軍との戦争のことである。

当時の朝鮮半島は高句麗、百済、新羅の三国が鼎立していたが、唐が朝鮮半島北部へ侵攻して高句麗を滅ぼし、新羅の要請に乗じて百済を滅ぼし、唐の冊封下で新羅による朝鮮半島支配が確立される過程にあった。唐・新羅連合軍に滅ぼされた百済は、遺臣たちが百済復興の兵を上げ、政争に敗れ倭国に滞在していた百済王を擁立しようと倭国に救援を要請した。

斉明天皇はこれを承諾し百済難民を受け入れるとともに唐・新羅との対立を深め、661年に自ら朝鮮出兵するも遠征途中の筑前で死亡。息子の中大兄皇子(天智天皇)に託され、3次に渡り倭船1,000隻で47,000人を派兵して戦ったが大敗。捕虜を残して亡命を望む百済将兵と共に逃げ帰った。この敗戦が日本に及ぼした影響は非常に大きく学ぶべき点が多い。

唐側の勝利に終わった白村江の戦いは、中国史上屈指の大国となった唐統一王朝が出現し東アジアの勢力図が大きく塗り変わる過程で起きた戦争であり、朝鮮半島をも支配した唐に敵対するのは倭国のみとなっていた。白村江敗戦の翌年、唐から戦後処理の使節が来日した。倭国は戦々恐々であった。

時の政権は唐・新羅連合軍侵攻の脅威に備えて外交、国防、政治体制など統治システムを根本的に変革する必要性に迫られた。それは防人(律令制度下の軍事制度)や情報伝達システムの烽(とぶひ)の配備であり、水城(みずき)や大野城、基肄(きい)の城の築城であり、律令制度の確立となって現れ、倭国は「日本」へと国号を変えた。また、670年頃には唐が倭国を討伐するとの風聞が広まり、唐の国内情勢を探るために遣唐使を送った。我々が歴史の教科書で学んだ遣唐使の初期の目的は、国防のための情勢探索と友好関係の樹立でもあった。

倭国討伐は唐の事情により実行されなかったが、白村江での敗戦は倭国内部の危機感を醸成し、日本という新しい国家体制の建設をもたらした重要な出来事であった。

私は神社仏閣や城郭など日本古来の建築物を探ねるのが好きである。数年前に織田信



筆者 背景の緑地が特別史跡「水城跡」



「水城」遠望

長が築いた安土城址を訪ねた。その時、石垣に守られた天守を備える日本の最初の城が安土城と知った。その後、石垣を備えた日本の城の起源を調べると、白村江の戦いで唐からの侵略に備えた山城がそのルーツであろうとの説を知った。何と安土城築城より 900 年も前の事である。白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた百済の武将は倭国に逃れ、隋から得た知識と経験で日本に築城と防御の技術を伝えた。



大野城跡「百間石垣」

大和朝廷は大宰府を守るため多くの防御施設を築いた。“水城”は、博多湾側から筑紫に通じる平野を閉塞する目的で峰から峰へ全長 1.2km、基底部幅 80m、高さ 9m の 2 段式に築かれた土塁で、防御のための「遮断城」である。大野城は、大宰府背後の四王寺山の尾根をめぐる総延長 8km の城壁(土塁)を築き、城壁と接する谷には石垣を築いた朝鮮式山城で、城内には倉庫などを建て万一のときには大宰府庁が逃れて政務をとる機能も備えていた。更に都を難波から内陸の近江京へと移した。

私は“水城”を 2 度訪ねた。最初は軽い気持ちで。そこで歴史の事実を知り、その後詳細に調べると知らなかった史実が次々と現れた。2 度目に訪ねた時、史跡の高台に立ち私のフィルターを通して“水城”を遠望すると、現代的なビルや建築物は消え 1350 年前の出来事が走馬灯のように浮かんだ。大和朝廷は不利を想定できる状況の中で、なぜ唐との戦いに挑んだのだろうか？ などと思いつつ、白村江での敗戦を契機として先人達は英知を絞り、人々の安寧と日本の将来に向けて 100 年の計を立て、日本国確立に向けて努力したのだと学んだ。

戦後日本は戦勝国であるアメリカの様々な制度を導入したが、終戦の翌年 1946 年 8 月に昭和天皇は「朝鮮半島における敗戦の後、国内体制整備のため、天智天皇は大化の改新を断行され、その際思い切った唐制の採用があった。これを範として今後大いに努力してもらいたい」と敗戦国となった国民を励ましたという。

いつの時代にも、時の政権は歴史から学んで統治に組み込むのを好む。近くは「現憲法は占領下で米国及び連合国に押し付けられたものであるから憲法の自主的改正を」と叫び、立憲主義、基本的人権の尊重、恒久平和主義など日本国憲法の理念や基本原理に深くかわる問題が危惧されるような改憲勢力の主張であったり、遠くは神国日本には神風が吹くと教育しカミカゼ特攻までつき進んだ神風神話であったりする。そして近年、『白村江の戦い、歴史が示す日本の気概』(週刊新潮 2017 年 6 月号コラム)には、「中国が再び、(略) 中華大帝国の再来を目指し、周辺国への圧力を強めるいま、日本は歴史を振りかえり、独立国として、先人たちがどのような誇りと勇気を持ち続けたかを思い出さなければならない。」とのきな臭い論調も見られる。

私たちは歴史から何を学ぶか？ しっかりした考えを持ち、センサーが鈍らないように心掛けたいと思う。

参考資料：

[1] Wikipedia 「白村江の戦い」

[2] 地域別訪問城&訪問城分布図 「大野城と水城」